

28:23 そこで彼らは日を定めて、さらに大勢でパウロの宿にやって来た。パウロは、神の国のこととを証しし、モーセの律法と預言者たちの書からイエスについて彼らを説得しようと、朝から晩まで説明を続けた。

28:24 ある人たちは彼が語ることを受け入れたが、ほかの人たちは信じようとしなかった。

28:25 互いの意見が一致しないまま彼らが帰ろうとしたので、パウロは一言、次のように言った。「まさしく聖霊が、預言者イザヤを通して、あなたがたの先祖に語られたとおりです。

28:26 『この民のところに行って告げよ。あなたがたは聞くには聞くが、決して悟ることはない。見るには見るが、決して知ることはない。

28:27 この民の心は鈍くなり、耳は遠くなり、目は閉じているからである。彼らがその目で見ることも、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返ることもないように。そして、わたしが癒やすこともないようだ。』

28:28 ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らが聞き従うことになります。』

<説教>

ローマに入った使徒パウロは、監視の兵士が付いてはいましたが一人で生活することが許されました(28:16)。そのパウロはまずローマにいるユダヤ人のおもだつた人々たちを呼び集めて、自分がエルサレムからローマに来ることになった理由を説明しました(17-20)。パウロは自分が囚人として鎖につながれているのは「イスラエルの望みのため」だと言いました(20)。

パウロにとっての「イスラエルの望み」とはもちろんイエス・キリストであり、イエスの福音でした。そのパウロが宣べ伝えているイエスの福音については「いたるところで反対がある」ということを、呼び集められたユダヤ人たちは聞いていました(22)。それでパウロの考えていることをパウロ自身から聞くのがよいということになりました(22)。

〈そこで彼らは日を定めて、さらに大勢でパウロの宿にやって来〉ました。〈パウロは、神の国のこととを証しし、モーセの律法と預言者たちの書からイエスについて彼らを説得しようと、朝から晩まで説明を続け〉ました(23)。エルサレムで捕らえられた騒動の最中に、主イエスが「勇気を出しなさい。あなたは、エルサレムでわたしのことを証したように、ローマでも証しをしなければならない」とパウロに言われました(23:11)。そのイエスについての証しが始まりました。〈神の国のこととを証しし〉たとは、ユダヤ人たちが待ち望んでいた「神の国」が「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(マタイ 4:17)と言ってガリラヤで宣教を開始したイエスの到来によって始まったという証しです。この「天の御国」すなわち「神の国」の支配者、王なるキリストとはナザレのイエスなのだという証しです。私たちの罪のために十字架につけられて死なれ、墓に葬られ、三日目によみがえり、天に昇り、父なる神の右に着座して、天においても地においてもすべての権威が与えられている神の國の王としてイエスが支配しておられるという証しです。そして〈モーセの律法と預言者たちの書〉つまり今で言う旧約聖書からイエスについて説得するという

のはパウロがこれまで至る所でユダヤ人たちに対してしてきた仕方でした。「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。聖書はわたしについて証ししているものです」(ヨハネ 5:39)とイエスが言われた通りだと言うわけです。〈モーセの律法と預言者たち〉が語ったことはすべてイエスにおいて成就しました。だからこれまで〈神の国〉を待ち望み、求めて来たはずのあなたがた、〈モーセの律法と預言者たちの書〉を読み、神の約束を感じてきたはずのあなたがたは、今こそイエスを約束のキリストと信じ、神に立ち返る、つまり悔い改めるべきだ、そうして〈神の国〉に入るようになるとパウロは説得し、〈朝から晩まで説明を続け〉ました。おそらくその間、パウロだけが一方的に話し続けただけではなかったと思います。ユダヤ人たちの側からも質問や賛成や反対の意見がいろいろとあったのではないかと思います。それにパウロがまた答えるというようにして丸々一日が費やされたのでしょうか。エルサレムでガマリエルのもとで厳しい律法の教育を受けた(22:3)一流の「律法学者」だったパウロでしたからそんな議論にも耐えられたのでしょうか。

その結果はどうだったでしょうか。〈ある人たちは彼が語ることを受け入れたが、ほかの人たちは信じようとしなかった〉(24)。そして〈互いの意見が一致しないまま彼らが帰ろうとした〉(25)ということでした。なんとも残念な感じもありますが、しかしそういうユダヤ人たちの反応は、これまで「使徒の働き」を読んで来た中で、どこででも見られたことでした。いやユダヤ人だけでなく、異邦人の間でもそれは同じでした。それでもしかし、先祖代々〈モーセの律法と預言者たちの書〉を読み学び信じて来たはずであり、〈神の国〉を待ち望んで来たはずのユダヤ人たちでもイエスの福音を聞くと、そういう結果になるったのです。それは驚き、不思議と言えばそうです。しかしイエスの福音とはそんなユダヤ人たちをさえ「受け入れる者」と「信じようとしない者」に「ふるい分ける」驚くべき、不思議な、そして恐るべき知らせだということも私たちは覚えておく必要があります。そんなイエス(とその福音)についてルカはその福音書にシメオンの言葉によって記していました。曰く「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったりするため定められ、また、人々の反対にあうしとして定められています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです」(ルカ 2:34-35)。

そしてこのシメオンの言葉(それはシメオンを通して語られた神の預言でもあります)によって、このときローマのユダヤ人たちの応答が二つに分かれた原因が彼らの〈心のうちの思い〉にあったことが分かります。つまり、素直な柔らかくへりくだつた心でイエスをキリストと信じ、自らの罪の赦しをイエスのうちに求めて神に立ち返る(悔い改める)か、又は頑なで傲慢な心でイエスをキリストと信じないで、自らの罪の赦しをイエスのうちに求めず、神に立ち返らない(悔い改めない)かということです。それでパウロはそんな「心の頑なさ」についての警告がすでに預言者イザヤを通して語られ聞かされているではないか、と指摘したのです(25-27)。イザヤの同じ預言は、イエスとイエスのみことばを信じない、受け入れない人々について福音書の中でも何度も取り上げられていたことでした(欄外注参照)。もちろんパウロはここで単なる怒り、呪いをぶちまけているのではありません。むしろ、だからあなたがたはあなたがたの先祖たちと同じ罪過ちを繰り返し犯さないようにと警告したのです。

そして事実当時もまた同じ罪過ちをユダヤ人たちが繰り返していてもいたので、パウロは言いました。「ですから、承知しておいてください。神のこの救いは、異邦人に送られました。彼らが聞き従うことになります」(28)と。それで、確かに現在に至るまで、私たちに至るまで〈神の子の救い〉が送られています。「彼らが聞き従うことになります」とパウロは言いましたので、私たちはその「預言」を聞いて、それが私たちの身に成就するように願います。そして同時にあのイザヤの預言もまた私たちに対する警告として、イエスとイエスのみことばの前にへりくだって、畏れ慎みをもって聞く必要があります。今も旧新両約聖書をもって私たちに語りかけ、ご自身を信じる信仰と神に対する立ち返り・悔い改めへと招いてくださっている主イエス・キリストの招きに、心頑なにしないで、素直に、柔らかい心で応答しなければなりません。